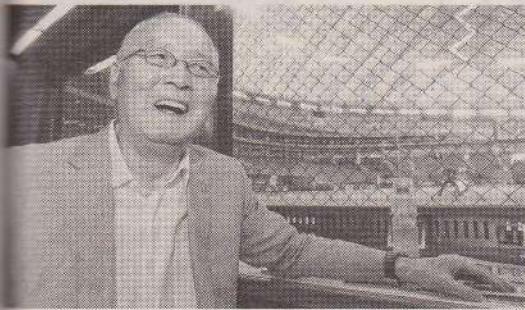


週刊新潮

1月31日号
370円

忘年会で「ベサメムーチョ」を歌つた —長嶋茂雄奇跡の回復

『いつも心に太陽を』は1967年に公開された英米の合作映画だ。不良生徒や難題に立ち向かう黒人教師をS・ポワチ工が好演したが、どんな時代であれ、どの国であれ、人は闇の中に一筋の光明を見出しつづける。希望と絶望、光と影が織り成す人間模様をご覧に入れよう。



暮れも押し迫った12月29日、東京のホテル西洋銀座

(76)。そこに佇んでいたるだけ周囲を明るくしてくれた男。彼こそ、我らがミスターが昨年末、「ベサメムーチョ」を歌い奇跡の回復を見せたのだ。

席した数分後、1人の男性が現れた瞬間、会場は拍手の渦に呑み込まれた。ジャイアンツカラーのオレンジ色を基調としたジャケット

席ひていたのは、その日に出席者が丸テーブルに着席した。ミスターは、その時に何の接点もないように見え、男女100人が三々五々集まっていた。彼らが待ち

「この会は、ある企業の社長が数年前から始めた『長嶋さんを囲む忘年会』です。

の宴会場。午後6時前、年齢も服装もバラバラで一見、何の接点もないように見える男女100人が三々五々集まっていた。彼らが待ち

を着て、しっかりと足取りで中央テーブルへ向かった男。彼こそ、我らがミスターその人だつた。出席者によれば、

「この会は、ある企業の社長が数年前から始めた『長嶋さんを囲む忘年会』です。

芸能界からは女優の倍賞美津子さんや芸人のヨネスケさん、せんだみつおさんが出席していましたが、球界関係者の姿は見当たらなかつた。ミスターは肘掛けの付いた特別な『大臣椅子』に座り、周りの人と談笑しながら食事をしていました。右手はまだ不自由なようでしたが、ミスターはあらかじめ切つてあつたメインの肉料理を左手で器用に召し上がつていましたよ」

会の途中で、新人歌手の川上大輔が桂銀淑のカバ

ー曲『ベサメムーチョ』を歌つた。3番のサビの部分

に差し掛かり、舞台上から川上がマイクをミスターへ向けた時、コトは起きたのだ。

「ベサメ、ベサメ、ベサメムーチョ」

と、ミスターが何度もか曲別に合わせて歌つたのである。別のテーブルにいた出席者ががその時を振り返る。

「長嶋さんは座つたままでしたが、大声で歌つていたので離れていてもはつきりと聞こえました。ミスターの歌声を聞いたのは初めてでしたが、後で聞いた話では、リハビリのために歌を歌つてはいるそうですよ」

始球式で投げたい

現役時代から想定外の活躍でファンを喜ばせたミスターだが、専門家から見て

もその回復力は桁外れだという。くどうちあき脳神経外科クリニックの工藤千秋院長が解説する。

「長嶋さんのタイプの脳梗塞は一番重症化しやすい。

それが歌を歌えるまで回復したのは、凄いことです。

まさに超人的な回復力といえるでしょうね

実は、ここ2年ほどミスターは自らの肉体を苛めるかのようにリハビリに取り組んできたのだ。長嶋氏の知人がこう教えてくれた。

「長嶋さんは毎日1時間弱散歩をして、週3回はリハビリ施設へ通い、マシーンを使つて膝を上げ下げする運動をしています。彼の前

でリハビリという言葉を使つて、『リハビリじゃない。筋力トレーニングだよ』と怒られるくらい。また、水を入れたコップを右手で握み、別の場所へ置くというトレーニングもしています。その甲斐あつて、麻痺で衰えた右手も、今はお腹の辺りまで上がるようになつたようです」

なぜ、そこまで過酷なりハビリを続けるのか。

「彼は『元気になつて、始球式で投げたいんだ』と言つています」(同)

ミスターは、マウンドに立つ日を夢見て今日もりハビリに励んでいます。